

# INFORMATION Circular

THE JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■第29回日本発生生物学会大会後記	佐藤矩行	1
■29回日本発生生物学会大会決算報告		2
■運営委員会議事録		4
■第39回日本発生生物学会総会議事録		6
■1995年度決算 (資料1)		9
■1996年度予算案 (資料2)		10
■発生生物学会に何を求めているのか	岡田益吉	11
■学会印象記	後藤利保	12
■小さな学会への懐古	栃内 新	14
■「超」個人的大会参加記	中島陽子	16
■第29回日本発生生物学会大会感想	(瀧口)林 恵子	18
■庶務報告その他		20
■日本学術会議動物科学研究連絡委員会 第16期 第5回委員会報告		22
■日本学術会議動物科学研究連絡委員会第16期報告		24
■東京大学海洋研究所シンポジウム “動物の変態——現象とその分子機構”へのご案内		27
■1997年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者 及び 研究助成候補者の推薦依頼について		28
■第13回(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 公開シンポジウム『生命体システムの修復』		30
■第11回研究助成候補者推薦要領		31
■ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム(HFSP)事業の募集		32
■第46回科学講演会開催案内		34
■平成8年度(第18回)沖縄研究奨励賞候補者推薦応募について		35
■会員異動		36
■賛助会員入会、広告掲載のお願い		38

## NO.84

AUGUST 1996

### 日本発生生物学会

〒153 東京都目黒区駒場3-8-1

東大・院・総合・生命環境系(生物)

会 長：〒 300 茨城県土浦市湖北2丁目5-10  
岡田益吉 (Tel: 0298-22-7348, Fax 兼用)  
e-mail: flyokada @ biol. tsukuba. ac. jp  
drok7 @ da2. so-net. or. jp

DGD編集主幹：〒 226 横浜市緑区長津田町4259  
東京工業大学生命理工学部  
星 元紀 (Tel: 045-924-5720)  
(Fax: 045-924-5777)  
(e-mail: dgdhoshi @ bio. titech. ac. jp)

事務局：〒 153 東京都目黒区駒場3-8-1  
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境系  
Tel: 03-5454-6632 (浅島研究室)  
Fax: 03-3485-2904 (生命系事務室)  
(この場合は必ず浅島の名前を入れる)  
03-5454-4330 (研究室)  
e-mail: cmasa @ komaba. ecc. u-tokyo. ac. jp  
(幹事長) 浅島 誠 (Tel: 03-5454-6632(直通))  
e-mail: cmasa @ komaba. ecc. u-tokyo. ac. jp  
(庶務幹事) 松田良一 (Tel: 03-5454-6637(直通))  
e-mail: cmatuda @ hongo. ecc. u-tokyo. ac. jp  
(会計幹事) 福井彰雅 (Tel: 03-5454-4397(直通))

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込5-16-9  
学会センター C21  
財団法人 学会事務センター  
日本発生物学会担当係 (Tel: 03-5814-5810)

日本発生物学会への入退会、住所・所属変更、会費納入、および出版物(DGD、インフォメーション・サーキュラーなど)の郵送については、上記の日本学会事務センターに書面でお問い合わせ下さい。

### サーキュラーへの投稿募集

日本発生物学会サーキュラーは会員の皆様の情報誌として年3回発刊されます。学会に対する提言、研究雑感、実験手法、学会見聞記、関連学会案内、書評等どのような内容でも結構ですので、是非事務局にお寄せ下さい。

宛先：〒153 東京都目黒区駒場3-8-1  
東大・院・総合・生命環境系(生物)  
日本発生物学会事務局  
Fax: 03-3485-2904 (担当 浅島)

## 第29回日本発生生物学会大会後記

京都大 大学院 理 佐藤 矩行

日本発生生物学会第29回大会を終えてほぼ1カ月がたちます。天候にも恵まれて3日間の大会を無事終了することができました。会員の皆様の協力を心から感謝しております。

① 本大会の参加者は、期日内申込者390名（一般238名、学生152名）、当日参加者224名で合計614名でした。第26回大会が約430名、第27回大会が約540名、第28回大会が約560名ですから、参加者は着実に増加し、大会がより大きくより活発になりつつあることは喜びにたえません。

② 3年ほど前に江口前会長から第29回大会を京都でやって欲しいと頼まれた時、どうせやるなら少しは特色のある大会にしたいと考え、いくぶん無理を承知でシンポジウムを計画しました。最近ではさまざまな研究集会が開かれ、いろいろな人の話を聞く機会が増えてはいますが、学会に3日間参加したら「受精から神経発生」くらいまでの最近の研究成果が理解できるような会にしたいというのがその主旨です。そのために3日間にわたるシンポジウムを企画しました。したがって一般講演が15分では3日間ではおさまりきらず、やむを得ず12分に短縮しました。さらにポスター発表わずか1時間だけになりました。また休憩時間もほとんど無く、さらに司会者に時間を厳守してくれるように（幾分強く）お願いしたこともあって、議論がほとんどできなかつたというご不満の声をたくさん耳にしました。そのことについては、幾分お詫びいたします。

③ 大会を準備する側の一番頭の痛いことは経費です。去年は藤澤大会準備委員長が大会経費のために大変骨を折られたと聞いています。私自身は、「学会大会は会員の研究の発表の場であり、情報の交換の場であるはずですので、できるだけ不必要な経費を省き、学会からの補助金と参加費だけで賄うのがよい」という考えの持ち主ですので、今回はお金集めにあまり力を注ぐことをせず、かくて、集まった賛助金は5万円、広告料20万円、展示料25万円で例年の半分以下でした。今年は当日参加費を7000円に上げました。たぶんずいぶん高いと思われた方も多と思いますが、おかげさまで昨年とほぼ同じ学会からの補助金で大会を運営することができました。余剰金が25万円出ましたが、このお金を来年の大会に使ってもらえるようお願いしているところです。

④ ベストオーラル発表賞・ベストポスター発表賞を設けました。やろうと決めたのは大会準備段階のかなり後のほうで、今回は参加者全員に審査を願うことにしました（今後もあるようなことがあれば、審査方法も考えた方がいいのかも知れません）。心配はほとんど投票がないのではないかとということと、組織票が集まるのではないかとことでした。前者は予想どおりになりましたが、後者は無く、会員の良識を感謝しております。両

賞とも1位だけは投票数がダントツでした。前者はホヤの分裂装置、後者はヒメイトミミズの再生に関する発表で、圧倒的に遺伝子関連の発表が多い中でこの2つが受賞したことは、学会の健全さを示すようにも思えました。

⑤ 最後に若い会員に苦言を一言。事務局の話では毎年着実に若い会員が急増しているということです。実際参加者の顔ぶれには若者が目立ちました。ところで、学会に加入するということは、その学会で決められた一定のルールに基づいて活動することです。大学院生だからといって会費が安い以外は特別なルールはありません。未入会で講演を申し込んだら、すみやかに入会の手続きを行うべきです。また、たまには総会に出席し、日本発発生物学会がどのような活動を行い、どのような方向に向かおうとしているか、一緒に考えるべきでしょう。

⑥ いずれにしても今回も活気のある発発生物学会大会を持続することができ、参加者の皆様に感謝しております。

## 第29回日本発発生物学会大会決算報告

### 大会運営関係経費

#### 1. 収入の部

大会参加費	3,756,000 円
(内訳) 期日内申込み (学生5,000円×152人、一般6,000円×238人)	
	2,188,000 円
当日申込み (7,000円×224人)	1,568,000 円
学会本部からの大会補助	300,000 円
講演要旨集印刷費補助	800,000 円
講演要旨集発送費	445,870 円
講演要旨集売り上げ (送料込み)	29,778 円
広告・展示料、賛助金	500,000 円
預金利息	428 円

---

収入合計	5,832,076 円
------	-------------

#### 2. 支出の部

講演要旨集印刷費	1,009,400 円
講演要旨集発送費	448,250 円

会場設営経費		1,770,739 円
(内訳) 会場使用料	550,400 円	
設備使用料等	750,339 円	
ポスターボード	470,000 円	
大会準備・運営経費		2,028,703 円
(内訳) 運営委員会・編集委員会経費	72,850 円	
人件費	1,341,400 円	
弁当経費	81,855 円	
休憩室茶菓子等	78,666 円	
郵便料・通信費	26,720 円	
名札・ポインター用電池等	174,081 円	
雑費 (コピー・交通費他)	253,131 円	
ベストオーラル発表賞・ベストポスター発表賞賞金		122,000 円
懇親会補助		202,984 円
残金 (学会本部へ返却)		250,000 円

---

支出合計		5,832,076 円
------	--	-------------

#### 懇親会経費

##### 1. 収入の部

懇親会参加費		1,160,000 円
広告・展示料からの補助		202,984 円

---

収入合計		1,362,984 円
------	--	-------------

##### 2. 支出の部

懇親会経費		1,362,984 円
-------	--	-------------

# 運営委員会議事録

平成8年5月22日 京都会館第1会議室にて

出席者 岡田 益吉（会長）、嶋田 拓、佐藤 矩行（運営委員兼大会委員長）、  
白井 浩子、東中川 徹（運営委員兼選挙管理委員会委員長）、  
八杉 貞雄、近藤 寿人、藤沢 肇、黒岩 厚、団 まりな、竹市 雅俊、  
浅島 誠（幹事長）、松田 良一（庶務幹事）、  
長濱 嘉孝（前幹事長、オブザーバー）、  
高橋美保子（次期大会委員長代理、オブザーバー）

## <報告事項>

### ・今回の大会についての説明（佐藤大会委員長）

今回はポスター発表134題、口頭発表148題であった。そのため口演時間を12分間に短縮した。総会を大会30日の最終コマに移した。懇親会については、急遽設定し行うことにした。ただし250名しか収容できないので了承して欲しい。今回、新たにベストポスター発表賞とベストオーラル発表賞（対象は学生とポストドクターに限る）を設け、その授賞式を総会で行い、賞金を出すなど、大会と総会活性化につながる新機軸をたてた。当日参加費を高くして、予約参加者数を増やし、当日参加者数を減らす方策をとった。

### ・学術会議関係（浅島幹事長）

日本学術会議に発生物理学会の団体登録を行った。

### ・研究助成について（浅島幹事長）

各種団体の研究助成についてはサーキュラー第83号を参照して欲しい。

### ・DGD関係（星編集、浅島幹事長代読）

DGDの発行は順調である。会員からの良質な論文の投稿を期待している。

### ・庶務報告（松田庶務幹事）

会員名簿作成について

本年実施の選挙に際し、新しい会員名簿の作成作業を開始している。名簿を会員にとって利用価値が高いものにするべくFax番号とE-mail addressを入れることを検討している。

- ・会計報告（松田庶務幹事）

西駕会計監査員（都立大）の監査報告と平成7年度決算、平成8年度予算案について。

- ・ISDB関係（岡田会長）

ISDB会員のMOD購読について、society memberとなる本学会会員にも、会員としての利点を考慮してくれるよう申し入れる。

- ・複写使用料分配のための調査について（浅島幹事長）

学協会著作権協議会分配検討小委員会より複写使用料分配のための調査があり資料を提出した。

### <審議事項>

- ・文部省科研費審査員の選挙

平成9年度の文部省科研費発生物学関係の1段および2段審査員の選挙が行われた。

- ・学会選挙関係（東中川選挙管理委員会委員長）

今年行われる会長及び運営委員選挙の予定日程が述べられ、了承された。選挙要領と投票用紙の送付は本年7月中、投票締め切り日は8月末日とする。

- ・会計関係（松田庶務幹事）

平成7年度決算および8年度予算案が審議の後、選挙関係経費の増額が提案され、予算案の修正が行われ承認された。

サーキュラー広告費の増額が提案され、事務局に一任することで合意した。

- ・事務局運営の合理化について（松田庶務幹事）

事務局の円滑な運営をはかるため、アルバイトを雇うなど事務経費を増やしたい旨提案があり、検討の後、当事者の負担軽減のため、予備費の一部を編集経費と事務経費に充てることが承認された。

- ・予備費の用途について

予備費の用途について議論され、DGDのカラー印刷代の一部学会負担、編集経費や事務局経費、大会運営経費の補助などにその一部を充てる方向で合意された。しかしながら、これらについては今後の予算状況を見ながら随時検討を行うとした。

- ・来年度大会委員長（代理）挨拶（高橋会員）

平成9年5月27日（火）～5月29日（木）に筑波大学の大学会館において第30回大会を

行う予定。抄録の体裁、シンポジウム、懇親会等について検討中であることが報告され了承された。岡田会長より特に植物関係の発生学について配慮して欲しい旨の意見が述べられた。

・再来年度の大会について（岡田会長）

過去10年分の大会開催地を検討し、熊本大学に御願いたい旨提案があり、安部氏はじめ熊本大学関係者の承諾を得て承認された。なお、この熊本大会で、会則に基づき [10年目の反省] を行う機会を持つことが確認された。

・国際集会に対する後援について（浅島幹事長）

片桐千明会員より要請があった [卵と胚外被の分子生物学と細胞生物学] 国際シンポジウム（平成9年10月12日～17日札幌で開催）に対する後援が審議され承認された。

・加藤淑裕記念賞の打ち切りについて（東中川加藤淑裕記念賞事業団委員長）

加藤淑裕記念賞打ち切りの経緯および同賞への本学会の援助に対する謝辞が述べられた。

・團 勝磨先生の訃報について（浅島幹事長・星編集主幹）

本学会初代および第3代会長を務められた團 勝磨先生の訃報に際し、DGDに追悼文を掲示すること、葬儀に本学会から花輪を送ることが提案され承認された。また、本大会最終日のシンポジウム4（責任者 浅島）の前の30分間を使って [團 勝磨先生 追悼の集い] を行う旨提案があり、承認された。

以 上

## 第39回日本発生生物学会総会議事録

平成8年5月25日 京都会館A会場にて

会場から渡辺憲二会員が議長に選ばれ、佐藤大会委員長、岡田会長らの挨拶の後、報告と審議が行われた。

## <報告及び審議事項>

・岡田会長より生物学が分かる役人を中央官庁に増やすべく（社）日本動物学会などの働きかけで国家公務員試験に生物枠が新設されたので、学生らに知らせて欲しい旨説明があった。またISDBのSociety memberとなることにより、日本発生生物学会の活動を国際的に拡張したいので、ISDBへ年会費を納めることを了解してほしい旨要請があった。

・浅島幹事長より学術会議への団体登録完了の件、再来年度大会開催地（熊本）等について報告があった。

・松田庶務幹事より会員数の動向と会員名簿の更新計画が説明された。本年5月15日現在の会員数は一般会員924名、学生会員325名、海外の会員33名、賛助会員10名合計1292名。毎年会員総数は7～9%の増加、特に学生会員は22～30%の増加を示している。また、今年7月に更新される会員名簿にFax番号とE-mail addressのアドレスを加えるので、会員の協力をお願いしたい。

・松田庶務幹事より平成7年度の決算が報告された。引き続き、西駕会計監査委員より監査報告が行われた。その際、サーキュラーの広告費の値上げが勧告された。審議の後、平成7年度の決算は承認された（資料1参照）。

・平成8年度予算案が示され、岡田会長からISDBのSociety memberの年会費支出に関する説明が加えられた。審議の後、平成8年度予算案は承認された（資料2参照）。

・東中川選挙管理委員会委員長から今年度の会長及び運営委員選挙の予定日程が述べられた。選挙要領と投票用紙の送付は本年7月中、投票締め切り日は8月末日とする。

・平林次期大会委員長（筑波大）から来年度の大会について説明があった。

・東中川加藤淑裕記念賞事業団委員長より加藤淑裕記念賞の打ち切りについてその経緯が説明され、同賞への本学会の援助に対する謝辞が述べられた。

・その他として質問、意見等を求めたが、発言者はいなかった。

#### ベストポスター発表賞およびベストオーラル発表賞授賞式

・ベストポスター発表賞およびベストオーラル発表賞の受賞者が佐藤大会委員長から発表され、引き続き、賞金が会長より受賞者またはその代理人に授与された。受賞者は次の通り。

#### ベストポスター発表賞

- 第1位 2P58 小針布実子 (北大・院・理)
- 第2位 1P17 恒川 直樹 (日大・生物資源)
- 第3位 1P36 西脇 優子 (大阪大・理)
- 第3位 1P50 利根川あかね (北里大・理)

#### ベストオーラル発表賞

- 第1位 1B1700 日比野 拓 (東工大・生命理工)
- 第2位 1A1412 杉山 清佳 (東北大・加齢研)
- 第2位 1A1424 久保田幸彦 (大阪大・理)
- 第2位 1A1712 岡部 正隆 (筑波大・基礎医)
- 第2位 2A1748 宮 隆史 (京大・院・理)
- 第2位 2B1712 田畑 秀典 (都立大・理)
- 第2位 3B1124 亦勝 実穂 (総研大・遺伝研)

(お知らせ)

1996年度(財)山田科学振興財団研究助成に対し、日本発生生物学会が推薦した以下の2名の方に給付が決定されましたのでお知らせします。

代表研究者	研究主題	助成金額 (万円)
高橋 淑子	個体発生における筋肉細胞初期分化の分子機構	100
古久保克男	ホメオボックス遺伝子によるショウジョウバエ脳の分節機構	200

# 1995年度決算 (資料1)

## 一般会計

### 収 入

学会費	10,532,060
賛助会費	210,000
文部省学術誌刊行補助金	5,760,000
バックナンバー	12,600
広告代	380,000
講読料	28,128
雑収入	885,600
利息	27,454

小 計	17,835,842
前年度繰越金	0
合 計	17,835,842

## 特別会計

### 収 入

前年度繰越金	818,407
一般会計より繰り入れ	2,000,000
テレホンカード在庫分	39,210
テレホンカード売り上げ	20,000
合計	2,877,617

### 支 出

DGD刊行費	5,837,961
DGD編集費	2,000,000
英文校閲費	50,000
学会事務センター	
事務委託費	1,385,401
発送費	1,381,148
諸経費	109,880
DGD保管費	148,320
サーキュラー印刷費	837,390
要旨集印刷費	800,000
大会援助費	250,000
運営委員会経費	216,952
事務局経費	188,750
雑費 (学会負担金)	96,440
特別会計へ繰り入れ	2,000,000
小計	15,752,242
次年度繰越金	2,083,600
合計	17,835,842

### 支 出

テレホンカード在庫分	39,210
次年度繰越金	2,838,407
合計	2,877,617

## 1996年度予算案 (資料2)

### 一般会計

#### 収 入

学会費	11,076,000
賛助会費	300,000
文部省学術刊行補助金	6,300,000
広告代	240,000
Black well 社より戻し金	1,000,000
DGDページチャージ	800,000
雑収入	20,000
利息	30,000
小計	19,766,000
前年度繰越金	2,083,600

合計 21,849,600

#### 支 出

DGD刊行費	7,116,000
DGD編集費	2,000,000
学会事務センター	
業務委託費	1,500,000
発送費	1,400,000
諸経費	100,000
DGD保管料	150,000
サーキュラー印刷費	950,000
要旨集印刷費	800,000
大会援助費	300,000
運営委員会経費	300,000
事務局経費	300,000
選挙費用	1,300,000
国際発生生物学会へ	150,000
予備費	5,533,600
合計	21,849,600

### 特別会計

#### 収 入

前年度繰り越し金	2,838,407
テレホンカード在庫分	39,210
合計	2,877,617

#### 支 出

テレホンカード在庫分	39,210
予備費	2,838,407
合計	2,877,617

# 発生生物学会に何を求めているのか

日本発生生物学会会長 岡田 益吉

大会についての感想などを含めて会長として所感を述べるように事務局から依頼された。今回の京都の大会は、主催者がユニークな企画を盛り込んで下さり、私としては参加するのが楽しみであった。発表された論文に関しては、口頭発表、ポスター発表を問わず、私の好みに合うもの、合わないもの、質の高いもの、そう思えないもの、色々であった。これは、見る人が違えば評価も異なって当然であろう。もし、私の個人的感想を申し上げることをお許し願えるならば、東洋の島国に居ても世界中からの情報の入手が容易になり、試薬や研究に必要なハードウェアも、欧米諸国にひけを取らないくらい潤沢に使えるようになった現在では、結構それなりに研究することはあるものだなあ、という感慨が一つ。そして、先頭に立って全く未開拓の地に一步を踏み出した、あるいは踏み出そうとしている研究もあって心強いが、それがさらに増加してくれたらなあ、という希望が一つである。

それはさておき、本大会では最終日の最後の時間帯にもシンポジウムが組まれており、選りすぐられた演者の話は大勢の聴衆を魅了した。そして、質問に十分時間をとれなくて残念ではあったが、あれだけの数の聴衆が最後まで残っていたことに私は感動した。しかし、せっかくの私の良い気分も長くは続かなかった。シンポジウムが終わると会場はあっというまに深閑としてしまった。実は、私にはその後の総会での、ベストポスター発表賞、ベストオーラル発表賞受賞者の発表が楽しみだったのである。

学会の役割はいくつかあるが、大会は大切なものの一つである。大会は参加者にとって、現在自分の関心のある分野がどのような方向に進んでいるかを探ると共に、現在進行中の自らの研究成果を公開して、他の研究者の批判を受け、また研究の価値を認めてもらう良いチャンスであるべきである。国際大会よりは母集団が小さいのはいかんともしいが、発生生物学会はローカルな大会であっても質の高さでは国際大会に匹敵するようになることが私の夢である。それだけに、大会での発表も、ディスカッションも片手間やいい加減であってはいけないと思うのである。特にこれからの発生生物学を支えていくはずの若い研究者には真剣にやってほしいと思っている。

ポスター会場や口頭発表の会場で、熱気に満ちたディスカッションが時々は見られるよ

うになった。それ故に、今年の大会で若者を対象として、ベストポスター発表賞、ベストオーラル発表賞を設けた意義は大きく、大会参加者が、特に若者達はその意味を真正面から受けとめてくれることを期待していたのである。まあ、最初の試みであるから誰が賞金をせしめるのか、知り合いだったらおごらせてやろうという野次馬半分でも良い。若者は好奇心が旺盛なはずであるし、僅か30分くらいの間であるから、自分が貰えるかもしれないと思う人と、野次馬とを合わせれば可成りの参加者が授賞式まで残るであろうという私の予測は完全に誤りであった。

大会以外にも、学会は研究者にとって必要な活動をしなければならないと私は思う。総会で決定したISDBとの連携も含めての国際的活動も大切であるし、研究費の獲得のための運動も大切である。一方、会員が受け身に終始してほしくはないのである。学会というのは、どこか自分と別の、何か役に立ちそうなことをやってくれるのを待っていればよいという存在ではない。学会の活性というのは会員個々の活性の集積なのである。今回の、発生生物学会若手会員の研究発表ポリッシュアップを狙ったアイデアは、私は学会の向上に役立つ良い企画だと思ったのであるが、会員の大多数はそうは思わなかったらしい。間もなく、10年目の反省の時期がやってくる。会員の皆さんは、特に若者達は何を望んでいるのであろうか。何も望んでいないわけはあるまい。それを明らかにし、活動方針を決める必要がある。これが今回の大会についての私の感想である。

## 学会印象記

関西学院大学理学部生命科学 M2 後藤利保

本年度の発生生物学会は京都会館で行われました。会館の裏には平安神宮があり、古都京都での開催にとっても相応しいと思いました。また開催中の三日間は初夏を思わせる晴天に恵まれ、足運びの方も良かったと思います。私は会の開始時刻前に平安神宮へ参拝し、お神籤で運試しをいたしました。結果は御想像にお任せいたしますが、皆様の中にもこの機会に古都京都の散策をされた方がおられるのではないのでしょうか。

さてこのすばらしい環境の下で行われた今年の発生生物学会ですが、聞きたい口演が時

間的に重なっていたり、人気のあるポスター発表に聴衆が多すぎて最後まで質問ができなかったりして、私自身は少し残念でした。私の聞いた演題数が少ないかもしれませんが、私の発表演題に対する全体的な印象は「融和」といったものでした。

一つには実験方法の「融和」が見られたと思います。移植実験等の古典的な形態学的実験方法とその移植による遺伝子発現の変化の解析等の分子生物学的実験方法がうまく調和した研究がその例です。これらの実験方法で「融和」のとれた研究内容は前年度にも見られましたが、本年度はそのような演題がより多かったような気がしました。次に各々の研究者が様々な動物種を用いて発生の神秘を解明しようと試みているわけですが、特に分子発生的な見地からこの研究対象である動物が「融和」していたような気がしました。つまり、様々な動物種でとられたホモログ遺伝子の働きに関する演題がその例だと思います。確かに動物種が異なればホモログ遺伝子の働きは多少違ってくるわけですが、「その違いは何によるものだろう」という疑問が異種の動物で研究する人たちを一つの演題に集わせる、まさに「融和」ではないでしょうか。実際、私はアフリカツメガエルを用いて研究をしていますが、今年は特に両生類に関する演題にこだわらず、関連するホモログ遺伝子を参考に演題発表を聞く機会が増えたような気がします。

全体的な印象とは別に、私個人が一番印象深かったのがポスター会場で多く見られた演題で、新規の遺伝子に関するものでした。私も今新規遺伝子のクローニングを目指して研究しておりますので興味を抱いたのです。その演題の多くは遺伝子のシーケンスデータが解析されたに止まっていたので、それらの遺伝子の機能解析等については今後注目していきたいと思いました。また同時に私ももっと早く研究成果をあげなければ取り残されるような気がしました。

私はいつも学会でのシンポジウムを教科書と問題集が一つになったようなものと考えていました。教科書はいくつかの演題をまとめあげて、発生学上のある一つの方向性を指し示すもの、問題集はそれらの方向性について各研究者が疑問に思い、討論を積み重ねるものというふうです。しかし、今年のシンポジウムはその内容が多種にわたっており、私は教科書として聞いていくのが精いっぱいでした。ただその内容はみな興味深いもので、最終日の「動物のボディープランの決定」は特に印象深く、発生における誘導分子機構の単純さと複雑さを痛感しました。

最後に、私は学会で演題やシンポジウムを聞いて学ぶ以外に、いろんな研究者と交流す

ることも大切だと考えています。実際、今回の学会でも実験方法などのアドバイスや演題以外の知見を多く得たと感じます。ただ今年はこのような交流が最も盛んな懇親会に人数制限がつき、私も少し敬遠して参加しませんでした。このことが少し残念だったので、大会の運営に携わっておられる方々にはまことに失礼なのですが、次回の学会では善処していただけるよう強く希望いたします。

## 小さな学会への懐古

北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻 栃内 新

毎年サーキュラーに学会の参加印象・感想記が載る。いままでは、まったく他人事として著者の方々の印象記を読ませていただいていた。辛口の批評や生産的な提言などが文章として読める形で提供されることは珍しいこともあって、いつも楽しみにしていた。ところが今回、原稿を依頼されてみてはじめてわかったことは、書くほうにしてみたらこんなに難しいテーマはないということである。今まで、毎年執筆されてきた諸先生方のご苦勞をあらためて認識しつつ、本題に入らせていただく。

私の頭の中には、発生生物学会は動物学会のサテライト学会のようなもので「小さいもの」という印象が刷り込まれている。私のはじめて参加した仙台の宮城県労働福祉会館で主催された1975年の第8回大会では、会期が2日間、会場数が2、演題数は71（もちろんすべて口頭発表）、そして何と講演時間が20分もあった。それが21年後の今年1996年第29回になると、会期が3日間、会場数が3（うちポスター会場1）、演題数はなんと282（うち口頭発表148）、そして口頭発表の講演時間は12分に短縮されている。私の定義では、もうこれは「小さな」学会とは言えない。学問的興味を共有する少数の研究者が集い、満足のいくまで討論し、ともに学問の発展を目指すという小さな学会の特徴を維持することはもうできない規模になったとも思える。このくらいの規模になると「あの人もたしか参加しているはずだけど、3日間いちどもみかけなかった」などということもそう珍しくなくなった。

小さな学会は家族的雰囲気という温もりだけを持っているわけではない。私のもう一つのメイン学会である「大きな」動物学会と比べて、発生生物学会は発表するのには「恐い」

学会でもあった。発表に対する質問の数の多さとその学問的鋭さのために、しっかりと準備されたデータを持って出て行かないと許されないというような雰囲気を感じられたものである。聴衆の平均的学問レベルが高いということのほかに、専門分野の少々の違いを乗り越えての興味をぶつけられることも多く、そこに小さな学会特有の熱気を感じられたものである。発生学に関係することであるならば多少の分野の違いなどはぜんぜん気にしないで討論しあうという、ある意味では学会あるいは学問分野の未熟さ故の貪欲さでもあったのだろうか。それが近頃、この学会の持っていた「暖かさと情熱と怖さ」が減ってきたように感じるのは、ただ単に私が老獺化してきたことばかりが理由ではなく、学会が大きくなってきたことの影響が確かにあるだろう。というのが今の私の率直な感想である。

では、どうすれば良いのか。ひとつの方法は分割であろう。サテライト学会のそのまたサテライトを作るのは大変であろうから、分科会をつくっていくというのが現実的かも知れない。参加者はその分科会の部屋から移動する必要がないくらいの規模に分割することができるのであるならば、昔の「小さな学会」が再現できるかも知れない。しかし、プログラムを眺めてみると、すべての演題を3つか4つの分科会にうまく振り分けることがそう簡単ではないことは、すぐに見て取れる。演題募集の際に分科会を提示してみて、どこで発表したいかを発表者に選んでもらった上で調整するというような試みあたりからはじめるのが良いかも知れない。

もう少し現実的な提案は、一般発表をすべてポスターにしてしまうことである。国内においてもポスター発表という形式は定着しつつあるし、そのメリットはいまさら指摘する必要もない。そして口頭の講演はすべてシンポジウムあるいは特別講演の形にしてしまうということは、もう可能なのではなからうか。そのとき問題になるのは講演の企画であろう。今年の学会のシンポジウムでもそうであったが、すでに学問的にエスタブリッシュされた方々に、すでに日本語でもパブリッシュされてしまっている内容で講演を依頼すると、確かに聴衆が多くなり社会的な宣伝としても通りが良いことは理解できるが、そのようなことが発生生物学会に所属しているような研究者の方々にどれほどの学問的メリットを与えるかははなはだ疑問と思わざるを得ない。また、忙しい有名研究者の方々にとっても、ただのサービスをお願いしているだけになってしまっているのではなからうか。これは双方にとって良いことではない。それよりはむしろ、毎年新しいテーマを模索しながら現在進行形のあるいは未来へ向けてのテーマについての討論の場を作るためのワークショップのようなものを全面に押し出してみることも検討に値すると思われる。

いろいろと勝手なことを書いたが、私は私を育ててくれた発生物学会が好きである。この学会が、いつまでも「小さな学会」の雰囲気を持ち続けて、サイエンスを楽しむ人々が集い、若い研究者を育て続けてくれることを期待している。最後になったが、佐藤先生をはじめ今大会の準備・実行にご尽力いただいた方々に感謝の気持ちを申し上げたい。私の期待する「小さな学会」の雰囲気を盛り上げてくれるような企画や心配りが、随所に見られたことに心から感謝いたします。

## 「超」個人的大会参加記

慶応大学生物学教室 中 島 陽 子

私にとって、五月の下旬に開かれる発生物学会大会に参加することは、授業を休講にしなければならないという、多少の後ろめたさがともなうけれども、それぞれの開催地の初夏を味わうことができるという楽しみもある。とりわけ京都会館を囲む櫛の緑を渡ってくる風の心地好さは格別。巡らせば東山は、楠の新緑に彩られている。京都での前回の発生物学会では、南禅寺の境内に棟（センダン）の花が散り敷いていたのを思い出す。

今回の大会でも、随所に実行委員会の工夫や努力が感じられたのはうれしい。その最たるものは、ベストプレゼンテーション賞であろう。学生、ポスドクの発表に対して参加者全員が口頭・ポスタに各一票の投票権を持つ。大会最後に持たれた総会での表彰式。決して一番安いものではなさそうな祝儀袋が塗りのお盆に用意されている。仰々しい儀式が始まるのかと思いきや、場面は至ってカジュアルであった。だいいち、表彰される「芳しい双葉」たちは居合わせない。たまに本人が賞金を受け取りにきても、ごく軽い会釈程度で去っていく。企画者の意図はともかく、何か新しい風が吹き始めたのかと少し嬉しかった。（双葉から芳しいセンダンは白檀のことで、南禅寺のセンダンはオウチともいい、別の植物である）

また大会委員会は特別企画として、大会の前の週に亡くなられた団勝磨先生の追悼集会の時間を捻出して下さっていた。その会のお世話をしよう仰せつかったが、急なことゆえ、お話しくださる方々を確定するのに手間取ったりもした。しかし、大会委員会の方々、

特に久保田洋さんの大変なご助力で、案内状の用意をすることができた。また当日、会場で投影するスライドも用意してくださっていた。また浅島誠さんは、次に続く御自分のシンポジウムの時間を削って時間を提供して下さったうえに、司会の役もお引き受けいただいた。ただでさえ多忙を極めておいでだろう佐藤大会委員長始め委員の方々、またこの企画実行にご協力下さいました方々の、ご支援とお心遣いに紙面を拝借して心から御礼を申し上げます。

追悼集会は米田満樹さんによる、先生の仕事の紹介で始まった。スピーカーお一人の持ち時間は5分。各人、時間超過は厳しく戒められていた。先生の長い研究生活を5分に凝縮するというのは至難の技ではなかったかと推察申し上げる。リハーサルまでなされた後程伺い恐縮した。先生は、細胞分裂機構や不等分裂についての学説や研究成果という以上に、そのお人柄、その存在そのもので、多くの人を引きつけたと言えるのではないかと。つづいてたれた岡田節人さんは、弟子でも共同研究者でもなく、同じ学問を志すものとして、先生に魅せられた立場から、発生学に細胞を取り入れたひととしての先生の功績を語られた。次にお話くださった酒井淑さんは都立大で団研究室が最もアクティブであったころの弟子のお一人である。酒井さんはこの5分のために京都にきてくださった。先生の身近で過ごされた方のお話は、先生のお人柄、研究生活についてのお考えなどが滲みでていて、懐かしさで胸がつまった。最晩年まで、研究に対しては厳しい態度を維持なさり続けた先生については、それを語られた田中省二さんの誠実さにより、一層強く心に刻みつけられた。最後は、団まりなさんに締めくくっていただいた。父上を失った直後に、公私分ちがたい立場でお話いただくのは、おつらかったことだと思う。父親としての先生は、学問を志す娘を一個の人格として、フェアに扱ってくれたというエピソードを伺い、先生の口から一度ならず語られた「女性には女性の研究の仕方がある」という言葉は、あくまで女性も対等な研究者として認めたいうえで、その特性の生かし方をおっしゃられていたのだと納得した。

会が終わってから、酒井さんは、彼女には厳しいとみえた先生も、岡崎嘉代さんをして、先生はすっかり甘くなってしまったと嘆かせる状態であった、ということ話を話し損ねたといっていた。その岡崎さんからみれば、弟子のうちにはとても数えてはもらえない、しつぽに位置する自分が、一体何ができるのかと自問しているとき、井上信也さんからの弔辞に、おりしもこのような言葉があった。……“自然を分析するのではなく、呼びかけ

る自然の、さあ、こんなことを聞いてみますか？との間に、耳と目を澄ませ聴きとる”と言う先生の教えが、弟子から弟子へと広まっていくことを願う……と。この追悼集會に団勝磨の名を、文献どころか伝説でしか知らない遺伝子世代の若い人たちが参加してくれていたことを、ほんとうに嬉しく思う。

ところで松田良一さんから、私にこの原稿依頼と共に、メイジアの訃が伝えられた。時を同じくして逝った二つの巨星、Katsuma Dan と Daniel Mazia との生涯にわたっての信頼しあった交流がいかなるものであったかを、私達は伝説ではなく、先生の語りとして聞くことができる。それは不思議な構成の本、「ウニと語る」である。学会出版センターの山田猛さんは、この本を世に出すのに、ずいぶんご苦労されたとうかがっている。学問を支えるやり方には、このような道もあるのだと、認識をあらたにした次第である。

ここでもう一つ、団先生について述べておきたいことは、先生は私を含めイレギュラーなキャリアの人たちにもチャンスを与え、育ててくださったということである。研究が高度な技術や設備に支えられ、それに応えるように大学院進学率が高くなる世の中の動きの一方で、多様化ということも云われている。いろいろな背景を持った人たちが、それぞれ個性のある仕事をもって、この学会の場に集うこと、それも先生の遺志を継ぐことの一つではないかと、勝手に考えている。

ウニと語る、真に敬虔に自然の声を聞かなければならないし、かつ時間をかけて待っていれば必ず解読できる。誠と真心は、いつの日にかは必ず通じてくれると言う先生の信念（井上信也さん弔辞より）を、発生学という同じ興味を持つ私達それぞれが、心に刻んで生きていきたい。

## 第29回日本発生生物学会大会感想

三菱化学生命研 (瀧口)林 恵子

大学院を終了し、早X年(!)が過ぎようとしている。大学3年の時、集中講義でたまたま聴いた浅島先生の、“分子の名前が一つも出てこない”発生学の講義に魅せられて研究者への道を志し、大学院で当時はまだ“分子の名前がほとんど出てこない”組織間相互

作用の研究に足を踏み入れてから早10年以上が過ぎてしまった。相変わらず分子の名前があまり出てこない研究をしているが、さすがに分子生物学を全く使わないわけにはいかない。最近、大脳皮質の領野形成と言う発生でもかなり後期の、それも哺乳類にかなり特有の系を実験対象にしているので（おまけに2人の子供たちを親か夫に預けての学会参加なので！）、3日間通しての発生学会への参加は本当に久しぶりだった。

私が神経科学の勉強（と子育て？）に四苦八苦していた間に発生学会は変貌してしまった。演題数が増えたことは発生学の研究人口が増えているわけで喜ばしいことではあるが、伝統であった”活発な討論”をするにはさすがに一人12分の持ち時間はすくないなーという印象を持った。質問者の所属を問わないのは時間的制約のためしょうがないことだが、若い人は“あーあの有名な××先生か”と認識するのに結構役に立つのになーと思ったり、いろいろ細かいことは思ったが、なんと言っても演題内容が数個のキーワードですべてくくってしまうのではないかと思えるような画一性であった。それだけ転写因子や分泌性のシグナル因子が発生系で重要だと言うことの裏返しでもあるのだと思うが、数限りないとは言わないが非常に多くの因子の生理的意味は、ハエはともかく哺乳類において証明されるのだろうか。たくさんの発生関連分子が記載された後にはどのような展開が予想されているのだろうか。一つには、進化とか種の多様性とか、ちょっと前までは証明のしょうがなく何言ってもいいような半分哲学のような研究がもしかしたら実験科学になるのかもしれないという雰囲気を相沢先生や黒岩先生が醸し出していた。未開拓の分野という意味では神経科学に勝るとも劣らないのでそうかーという気がした。しかし、発生学そのものはどこへ向かっているのだろうか。神経科学の分野では、あまりに複雑な神経系の多様性のせいで、最初から脳の理論的研究、システム脳科学的研究、分子生物学的研究のバランスのとれた発展と言うことが意識されているようである。発生学にも、当てはまるのではないだろうか。

団勝磨先生が学会直前にお亡くなりになった。また、加藤淑裕記念賞が今回で終了になった。三菱化成（当時）生命研の顔であった先生が突然お亡くなりになってからもう6年が過ぎたのかと改めて年月の経過の早さを思うと同時に、また、加藤先生だけでなく団先生も発生学会の直前にお亡くなりになったというのは何か巡り合わせがあるような気がしてしまう。私たちが大学院生に成り立ての頃は、加藤先生は現役で発生学会長をされていたと記憶しているし、団先生も毎年のように学会に参加されていたように思う。直接面識

はない私のような一院生でも研究者としての“尊敬と憧れ”を持って先生方のお姿を拝見していた。当時の発生学会では、何でもいい分化マーカーの蛋白あるいは抗体の認識する分子の“遺伝子のクローニングができた”だけで“わーすごい！”と思うような雰囲気であった。四肢のパターン形成も中胚葉（神経）誘導も、“現象を詳細に見て考える”状態で力任せに何かやると言う域には達していなかった。もちろん、世の中ではハエの発生に重要な遺伝子にあるホメオボックスが脊椎動物（ヒトを含む）で見つかりガン遺伝子が見つかり、現在の状況は十分に予知できたのではあるが……。岡田節人先生のお話の中で、団先生が発生学において“細胞”と言うものを意識させた功績は大きいと言うようなことを話されていた。その例は、私にでもすぐに挙げられる。例えばスーパーマンの誘導の仕事では、オーガナイザーと言う“胚域”による他の“胚域”への誘導と言う概念が提唱された訳であるが、細胞が意識され始めると選択的な増殖とか選択的な細胞死とか細胞レベルの解釈が必要になり何らかの“誘導因子”の作用機構に関して細胞生物学的見方が必要になって来たように思っていた。しかし今や非常にたくさんの転写制御因子や分泌性の分子の登場で遺伝子間のカスケードや相互作用に関しては急速に情報が蓄積されているが、細胞というものが少し前に比べて見えなくなってしまった感がある。“発生学は遺伝学とは違って、途中のプロセスを明らかにする学問である”と、大学の恩師三木（能村）堆子先生がおっしゃっていたのを今更のように思い出す。奇しくも、三木（能村）堆子先生は団先生のお弟子さんでつい先日も先生の御退官記念のパーティーで団先生のすばらしさを耳にしたばかりだったので、日本の発生学も一時代が明らかに終わったのかなと、年寄りじみたことを思った。

## 庶務報告その他

事務局庶務幹事 松田良一

### 会員名簿のバージョンアップについて

第29回大会（京都）の総会にてお伝えしたとおり、新しい会員名簿作成を機会にFax番号とE-mail addressを加える作業を実施しました。急なお願いにもかかわらず、短期間で多

くの会員の皆様からレスポンスをいただき、無事、選挙日程に間に合わすことができました。ご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。この新しい会員名簿が有効に使われ、研究情報その他の交換がより容易かつ迅速になり、皆様の研究に益することを期待します。

尚、今回のバージョンアップはFax番号とE-mail addressの追加に限られており、所属、住所、電話番号の変更は同時に申し出がない限り、行っておりません。変更又は修正等がある方は直接、学会事務センターにお申し出下さい。くれぐれも事務局長にはお申し出されませんようお願いいたします。

#### 4年以上の会費未払い会員について

名簿作成の際、4年以上に渡り会費を納めていない会員が72名程おられるのが判明しました。本来なら、それぞれの方々全員に会員継続または退会の意志確認と滞納会費一括納入のお願いをすべきところではありますが、当方の時間とマンパワーの不足のため、連絡がついた数名の会員を除き、退会者として取り扱わせていただきました。いちいちお名前は挙げませんが、自動的に新会員名簿からその方々のお名前は削除されています。もし、ご存知の（元）会員で名簿にのっておられず、かつ会員として残る意志のある方がおられましたら、どうぞ、ご本人に再入会手続（滞納金の納入が前提ですが）を学会事務センターにとるようにお伝えいただくと幸甚です。

このような事態が発生した原因の一つに、一定年数を経た会費未納者を自動的に退会者として扱う作業を学会事務センターに依頼していなかったことが挙げられます。そのため、何年間にも渡り、無料でサーキュラーその他がその人に送付され続けていたわけで、学会予算に困窮してきた本学会らしからぬことでした。会費未納のまま自動退会することを認めるのは、例の住専処理と似て不本意ではありますが、事務局としてもこれ以上の対応はマンパワーに限りがありますので、今回は自動退会措置を執らせていただくにとどめました。事後ではありますが、ご了解下さい。今後は、本学会の運営（DGD編集、大会開催はもちろんのこと）が、多くの一般会員の皆様と同様（?）、自分の発生生物学研究よりはるかに多くの時間をそれ以外の業務その他に費やしている人間たちで行われていることをご理解いただき、この様なエクストラワークをしなくても済むようにご協力下さい。また、学生会員の皆様は、卒業就職等で移動する際には学会事務センターに異動（所属や学生から一般への変更または退会）手続を速やかにとられるようお願いいたします。指導教

官にあたる先生方もその辺をお心掛け下さい。

似たような学会運営上のジレンマは他の基礎生物学系諸学会にも存在すると思われる。雑誌の編集作業も同様でしょう。手弁当による儒教的学会運営をやめて、プロによる組織運営が可能な程度の会員数をもつまでに個別学会を統廃合し、フェデレーション化して（例えば日本生物学会など）、その傘下に情報交換を密にできる形で発生物学分野の分科会を工夫して作るのも一つの解決法だと思います。その方がトータルとしては経済的でしょう。会員諸賢はいかがお考えでしょうか。ご意見、ご提案を事務局にお寄せ下さい。そのまま次号サーキュラーに掲載したいと思います。

## 日本学術会議動物科学研究連絡委員会 第16期 第5回委員会報告

### A 総会諸報告（各委員会、研連、会長その他）

議事： a. 脳科学研究推進について、勧告案：了承

b. 運営審議会附置関連研究連絡委員会等指定委員会の設置について、設置決定

c. 運営審議会附置会員推薦手続検討委員会の廃止について、任務終了により廃止決定

d. 日本学術会議と国際対応、第7常置委員会井口洋夫委員長報告、日本学術会議が共同主催する国際会議は、平成7年度

e. 第3回アジア学術会議～科学者フォーラムの結果について報告、将来は日本以外の国の世話役となるが、当分の間、日本学術会議が担当して継続

f. 我が国の学術研究体制は如何にあるべきか（伊藤正男会長提案）

①学術研究が21世紀を拓く

②政府支出研究費の増額要請

③研究分野

④研究費の配分方針

⑤研究者の処遇

⑥人材の育成

- ⑦研究機関
- ⑧国際交流
- ⑨学協会活動の強化
- ⑩我が国の学術研究活動の統合的推進

以上について討議

#### B. 第4部会・審議事項

- a. 大学院重点化対象大学における臨海実験所など附置施設の大学院化について全国国立大学臨海臨湖実験所長会議菊池泰二議長よりの支援願いについて、文部省の所管の問題などがあり、なかなか難しいが、各方面で努力している。
- b. 博士研究員制度の拡充に関する要望書、日本動物学会丸山工作会長よりの要望書、日本分子生物学会から平成7年9月18日付で要望書が出されている。日本学術会議細胞生物学研連高橋泰常委員長、日本細胞生物学会石川春律会長から博士研究員制度の拡充に関する要望書が平成8年3月25日に出され、アンケート調査に基づいて細部に触れている。
- c. 平成10年度科学研究費補助金に係わる「時限付き分科細目の決定」について平成8年8月30日（金）までに提出、各部1件平成9年度のは、第4部では本研連からの「自然史科学」が1位で4部から出ている。採択は7月の学術審議会で決定される。9年度の各部からの要望。
  - ①副会長世話担当：遺伝子治療基礎
  - ②第1部：健康科学
  - ③第2部：国際取引
  - ④第3部：世界経済
  - ⑤第4部：自然史科学
  - ⑥第5部：感性工学
  - ⑦第6部：土地利用科学
  - ⑧第7部：バーチャルリアリティーと医学
- d. 分子レベルの構造生物学の我が国における振興について  
分子生物研連、生物物理学研連、生物科学研連 提出、了承された。
- e. 21世紀を展望する新教育課程編成への提案——理科教育、数学教育、技術教育、

情報教育、及び、21世紀をめざす教師教育の2つの本が日本学術協力財団から  
日学選書として5月末に出版予定。

f. 昨年本研連で行ったシンポジウム「今、動物学がおもしろい～Ⅰ宇宙と地球生  
物」及び「今、動物学が面白い～Ⅱ動物はどのようにして子孫を殖やすか」の  
二つの本が日学選書として8月出版予定

g. 平成10年度共同主催国際会議推薦について、9件中8件採択

h. 第4部夏季（地方）部会の開催

平成8年7月2日（火）～3日（水）土岐市産業文化振興センター・セラトピ  
ア土岐にて開催

（報告、加納六郎学術会議会員）

## 日本学術会議動物科学研究連絡委員会第16期報告

A. 日本学術会議第4部会第16期第10回平成8年7月2日（火）10：00～12：00土岐市  
のセラトピア土岐にて開催議事

a. 平成9年度科学研究費補助金に係わる時限付き分科細目の設定副会長世話担当  
と第1部～第7部の計8件が申請され、7月上旬に文部省で、第2部の国際取  
引、第4部の自然史科学、第5部の感性工学が採択となった。

b. 平成10年度の分については上記9年度の自然史科学が採択決定のため再要望は  
取り下げた。

c. 第4回アジア学術会議実施要望（案）

平成9年2月3日（月）～7日（金）

日本学術会議及び三田共用会議所にて開催予定、参加者は、中国、インド、イ  
ンドネシア、日本、マレーシア、フィリピン、大韓民国、シンガポール、タイ、  
ベトナムから2名ずつ計20名、日本からは会長と人文・社会科学系副会長の2  
名が出席、議題は「持続可能な発展とアジアにおける学術協力のあり方につい  
て」

d. 研究連絡委員会における検討事項（案）第一常置委員会委員長より各部に検討

依頼

- e. パラダイムの転換を中心とする学術の動向について、第4部としては、池田重良会員がまとめた。
- f. 第4部専門委員会の改組（名称変更）について、天文学研究連絡委員会日食専門委員会を天文観測国際共同事業専門委員会とする。
- g. 計算機科学高等研究所の設立について構想、設立趣旨、設立の必要性について情報学研究連絡委員会から説明があった
- h. 将来計画委員会における検討事項（案）  
今までの将来計画委員会は、日本学術会議が今の六本木から横浜の「みらいとし」へ移動することの計画を行ってきたが、この移転が凍結されたため、本来の使命である21世紀へ向けての将来計画を行うことになった。
- i. サイエンスミュージアム小委員会  
大学博物館、地方博物館、国立中央博物館についてのまとめをして、10月の総会に中間報告をすることとなった。
- j. 高齢社会の多面的検討特別委員会  
高齢者の「生きがい」を中心として医療、福祉、経済、法律等の各面から検討し、これをまとめて、10月の総会に中間報告をすることとなった。
- k. 学会の国際交流について  
日本発生生物学会と国際発生生物学会及び日本比較生理生化学会と国際生物科学連合比較生理生化学部門の届出があり、第7常置委員会の井口洋夫幹事に連絡した。

（報告、加納六郎学術会議会員）

## <お知らせ>

日本学術会議動物研連と(社)日本動物学会関東支部の共催により昨年夏に行われた動物科学シンポジウムの講演内容をもとにした本が出来ました。日本発生物学会の学会員には2割5分引でお分けいたします。購入ご希望の方は下記までFaxにて直接申し込んで下さい。

——今、動物学がおもしろい——

日学選書5「宇宙と地球生物」

日学選書6「動物は、どのようにして子孫を殖やすか」

編集発行 (財)日本学術協力財団

印刷製本 大蔵省印刷局

定 価 2,000円

刊行は平成8年8月末日を予定

### 「宇宙と生物」

私の宇宙飛行体験	宇宙開発事業団	毛利 衛
向井さんのお伴をしたメダカたち	東京大学助教授	井尻 憲一
動物の初期発生と宇宙環境	東京大学	小池 元
—カエルとイモリの発生—	東京大学教授	浅島 誠
	宇宙科学研究所	山下 雅道
ゾウリムシとクラゲは重力を感じるか	お茶の水大学講師	最上 善広
細胞はどのように重力を感じるか	東京医科歯科大学	佐藤 温重
植物はどのように重力を感じるか	帝塚山短期大学教授	増田 芳雄
	大阪市立大学助教授	保尊 隆亨
宇宙環境と人間—宇宙医学の現状—	名古屋大学教授	渡辺 悟
宇宙環境でのライフサイエンス	宇宙開発事業団	長岡 俊治

### 「動物は、どのようにして子孫を殖やすか」

性と生殖	東京工業大学教授	星 元紀
ゾウリムシは、どのようにして		
「子孫」を殖やすか	日本動物学会会員	樋渡 宏一
子孫を殖やすために工夫するハエ達	日本学術会議会員	加納 六郎
アゲハチョウはなぜミカンの葉に		
卵を産みつけるか	千葉大学学長	丸山 工作
魚類の性行動と性的可逆性	東京大学助教授	小林 牧人
サケとウナギの回遊	東京大学海洋研所長	平野 哲也
ヒキガエルが池の北側を好きな理由	早稲田大学	石居 進
鳥の雌はどのようにして雄を選ぶか	大阪市立大学	山岸 哲
哺乳類の性周期はなぜ髄だけにあるのか	日本動物学会会員	高杉 遥

申込み先：〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議事務局内(財)日本学術協力財団

倉持様宛

Fax 03-3403-6229

Tel 03-3403-9788

# ○東京大学海洋研究所シンポジウム

## “動物の変態——現象とその分子機構” へのご案内

脊椎動物、無脊椎動物を問わず、様々な動物の発生において変態が起こることが知られています。近年、変態現象の分子生物学的解析が進み、その結果脊椎動物と昆虫の変態ホルモン受容体のあいだに構造上の興味深い類似が見つかり、進化上はなれた動物種の間にも保存された変態の分子機構が存在することが示唆されています。本研究会では、脊椎動物（両生類、魚類）、ホヤ、ウニ、節足動物（昆虫、甲殻類）および環形動物の変態の第一線の研究者の方にお集りいただき、講演と討論を通じて多様な動物種の変態機構のあいだにどのような共通性があるかを検討したいと思います。また、分子生物学、内分泌学、生理学、生態学など様々なアプローチを通じて、変態現象の多様な側面を探りたいと思います。変態に興味のある皆様のご参加を歓迎します（参加無料）。

[日 時] 11月12日（火）午後1時～6時

13日（水）午前9時30分～午後4時

[場 所] 東京大学海洋研究所講堂 東京都中野区南台 1-15-1 海洋研究所B棟 1階

[講演者]

両生類：金森章（養殖研）、菊山栄（早稲田大）、吉里勝利（広島大）

魚 類：沖山宗雄（東京大）、田中克（京都大）、塚本洋一（中央水研）、三輪理（養殖研）

ホ ヤ：森沢正昭（東京大）ウニ：雨宮昭南（東京大）、末光隆志（埼玉大）

昆 虫：上田均（遺伝研）、片岡宏誌（東京大）、藤原晴彦（東京大）

甲殻類：長澤寛道（東京大）、伏谷伸宏（東京大）環形動物：岡本研（東京大）

講演のタイトルおよび詳しいプログラムは9月初旬以降下記までお問い合わせください。

[お問い合わせ先]

渡 辺 俊 樹

〒164 東京都中野区南台 1-15-1 東京大学海洋研究所分子生物部門

TEL: 03-5351-6534, FAX: 03-5351-6488, Email: toshi@ori.u-tokyo.ac.jp

# 1997年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者 及び 研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」（1980年創立）は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞（猿橋賞）を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者に対し、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、本会を母体として新設された、公益信託（1990年3月13日文部省認可）「女性自然科学者研究支援基金」（受託者 東洋信託銀行株式会社）から支出されます。

つきましては、下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

## 記

### 猿 橋 賞

- 1 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者（ただし、下記の推薦締切日で50才未満）に贈呈します。
- 2 本賞は賞状とし、副賞として賞金（30万円）をそえます。
- 3 本賞の贈呈は1年1件（1名）です。
- 4 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（400字程度）、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度を、本会事務所までにお送り下さい。
- 5 締切は1996年11月30日（必着）。
- 6 第17会の賞贈呈式は、997年5月、東京において行なう予定です。

なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

### 猿橋賞受賞者

- |            |                     |            |
|------------|---------------------|------------|
| 第14回（1994） | 岡山大学理学部助教授          | 白 井 浩 子 博士 |
|            | 「ヒトデの排卵と卵成熟のしくみの研究」 |            |
| 第15回（1995） | 東京工学大学理学部助教授        | 石 井 志保子 博士 |
|            | 「代数幾何学における特異点の研究」   |            |
| 第16回（1996） | 理化学研究所主任研究員         | 川 合 真 紀 博士 |
|            | 「固体表面における化学反応の基礎研究」 |            |

## 研 究 助 成

- 1 海外シンポジウム等に参加し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
- 2 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
- 3 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において 満40才未満）の略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由等を記入して、本会事務所までお送りください。
- 4 締切は1996年11月末日と、1997年4月末日の2回。

なお 1992年度以降の研究助成金受給者は次の通りです。

氏名	学位	所属	出張先
池田 裕子	工博	東京工芸繊維大学助手	中国
田村 知子	修士	大阪市立工業研究所研究員	中国
井上 美穂	理博	京都大学霊長類研究所講師	フランス
内海紀代美	修士	東京大学大学院理学研究科在学	アメリカ
木下 圭	理学修士	日本医科大学助手	アメリカ
本間美和子	医博	東京医科歯科大学医学部助手	アメリカ
熊谷紫麻見	理博	日本学術振興会特別研究員	中国
山口 知子	東京	都立工業高専助教授	デンマーク
青木 圭子	理博	静岡大学工学部助手	ハンガリー
斉藤 玉緒	修士	北大大学院研究科博士課程3年	フランス
平岡和佳子	獣医博	明治大学理工学部助手	ドイツ
藤沢 千笑	理博	国立遺伝学研究所補佐員	ドイツ

女性科学者に明るい未来をの会

166 東京都杉並区高円寺4-29-2-217

電話 03-3330-2455 (FAX 兼用)

## 第13回 (財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団公開シンポジウム

### 『生命体システムの修復』

日 時：平成8年10月19日(土) 13時～18時

場 所：経団連会館ホール(東京千代田区大手町)

主 催：(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

後 援：科学技術庁、厚生省

オーガナイザー： | 香川 靖雄(自治医科大学 教授)  
| 埜中 征哉(国立精神・神経センター 神経研究所 部長)

演題：

1. ストレス応答による生体防御 13:10  
永田 和宏(東京大学 胸部疾患研究所 教授)
2. 酸化ストレスと生物の生存戦略 14:00  
井上 正康(大阪市立大学 医学部 教授)
3. 筋肉の形成と再生の遺伝子制御 15:10  
鍋島 陽一(国立精神・神経センター 神経研究所 部長)
4. HGFによる器官再生 16:00  
中村 敏一(大阪大学 医学部 教授)
5. 新しい内皮細胞増殖因子VEGFによる血管再生 16:50  
渋谷 正史(東京大学 医科学研究所 教授)

参加方法：参加費無料。ハガキまたはFAXにて住所・所属・TELを明記し下記宛お申し込みください。参加証をお送りします。但し定員(420名)になり次第締切ります。

申込締切：10月9日(水)

申込先：(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

〒194 東京都町田市旭町3-6-6

TEL 0427-25-2576 FAX 0427-22-8614

# 第11回研究助成候補者推薦要領

## 1. 趣旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的で国際的評価に値する研究を助成する。研究分野は、脳神経に関する実験研究のみならず理論。モデリング研究をも含む。候補者は、単独であっても、また共同研究であってもよいが、なるべく若い研究者の推薦を希望する。

## 2. 研究助成金

助成額は1件80万円、助成件数は8件とする。

## 3. 推薦者

- (1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

## 4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。(但し、所属機関の長の場合を除く)

## 5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いてもよい)

## 6. 推薦締切日

平成8年11月29日(金)とする。

## 7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

## 8. 採否の通知

平成9年3月末日までに推薦者あて、採否を通知する。

## 9. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成9年6月末までに研究助成金を送呈する。

## 10. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載の通り使用することを原則とする。なお、経理報告書を平成10年4月中に提出すること。

## 11. 成果の報告

研究の成果については、平成10年4月中に成果報告を当財団に提出するものとする。また、財団主催の研究会において発表を御願います。助成金による研究を専門誌に発表する場合には、“財団法人ブレインサイエンス振興財団(英文の場合は、Brain Science Foundation)の助成による”旨を書き添えること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03) 3273-3565 (直通)

# ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP) 事業の募集

ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP) は1987年のベネチアサミットにおいて日本政府より提案した国際プロジェクトであり、生体が持つ精妙かつ複雑な機能の解明を中心とする基礎研究を国際的に共同して推進し、その成果を広く人類全体の利益に共することを目的とします。

研究の対象 本プログラムにおける研究対象領域は以下の2分野です。

## 1. 脳機能の解明のための基礎研究分野

①要素過程 ②知覚と認知 ③運動と行動 ④記憶と学習 ⑤言語と思考

## 2. 生体機能の分子論的アプローチによる解明のための基礎研究分野

①遺伝子情報発現 ②形態形成 ③分子認識、応答 ④エネルギー変換

なお、上記の2つの領域の基礎研究を支える支援技術に関連した研究も本プログラムの研究領域として含まれます。

公募する事業内容は2ヶ国以上の研究者からなる国際共同研究チームを対象とした研究グラント、若手研究者を対象としたフェローシップ（長期・短期）およびワークショップの4つです。

- ・研究グラント……2ヶ国以上の研究者からなる国際共同研究チームを対象とした3年以内の基礎研究への助成です。45歳以下の若手研究者が参加していることが望まれます。助成額は1件あたり年間23万米ドル程度です。
- ・フェローシップ…長期（1～2年）短期（3か月以内）の2種類があり、若手研究者が国外で研究を行うための旅費・滞在費の助成事業です。博士号取得後5年以内またはそれと同程度の能力を有する若手研究者を対象としています。助成額は長期の場合年平均39,000米ドル程度です。
- ・ワークショップ…国際的な研究集会への助成です。

本プログラムの第7事業年度（1996年度）においては、日本人受賞者は研究グラントにおいて33名（共同研究者を含む）、長期フェローシップにおいてに32名でした。

公募締切 毎年8年9月1日必着（短期フェローシップは随時受け付けています）

応募手続き 応募に必要な書類を郵送いたします。郵送先（郵便番号、住所、氏名、電話、FAX番号）及び希望事業内容（フェローの場合長期、短期も明記して下さい）を英語にて明記の上、下記H F S P推進機構までお願いいたします（お問い合わせも直接フランスへお願いいたします）。

連絡先 HUMAN FRONTIER SCIENCE PROGRAM ORGANIZATION (HFSP)

Bureaux Europe. 20 place des Halles.

67080 STRASBOURG Cedex, FRANCE

TEL: +33-88-21-51-21

FAX: +33-88-32-88-97

E-MAIL: info@hfsp.c-strasbourg.fr

internet: <http://www.hfsp.org>

国内連絡先 科学技術庁科学技術振興局計画課国際政策室

tel.03-3501-3490 fax.03-3581-3079

通商産業省工業技術院総務部国際研究協力企画官室

tel.03-3501-6011 fax.03-3580-8025

# ☆☆ 第46回 科学講演会開催案内 ☆☆

主 催：財団法人 東レ科学振興会

と き：平成8年10月9日（水）

開 場：17時30分

開 演：18時00分 終演：20時45分

ところ：有楽町朝日ホール

東京都千代田区有楽町2-5-1

有楽町マリオン11階（J R有楽町駅前）

テーマ：“ポリマーサイエンスの新潮流”

I. 先端高分子材料の新展開

東京大学教授 西 敏夫

II. 高分子材料の分子設計

東京大学名誉教授 井上祥平  
東京理科大学教授

その他：入場無料・予約なし・先着順（定員638名）

〔ご来聴の方には、後日後援記録を進呈致します〕

問合せ先：財団法人 東レ科学振興会

千葉県浦安市美浜一丁目8番1号（東レビル）

Tel 0473-50-6103 Fax 0473-50-6082

# 平成8年度（第18回）沖縄研究奨励賞候補者推薦応募 についてご協力方お願い

初夏の候、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、今年度の沖縄研究奨励賞は別添の沖縄研究奨励賞規則にもとづいて、下記の日程により実施いたしますので、適格と認められる候補者をご推薦賜りますようお願い申し上げます。

## 記

- 1 推薦応募開始 平成8年7月15日
- 2 推薦応募締切 平成8年9月30日（当日消印有効）
- 3 受賞者発表 平成8年12月5日頃
- 4 贈呈式・受賞者記念講演 平成9年1月22日、那覇市内のパシフィックホテル沖縄で開催

## 〔問い合わせ先〕

〒100 東京都千代田区霞が関3-6-15  
グローリアビル7階  
(財) 沖縄協会「沖縄研究奨励賞」係  
Tel 03-3580-0461 Fax 03-3597-5854

## 会 員 異 動

### <新入会員>

(氏名)	(所属)	(住所)	(①テーマ、②材料)
船山 典子	北里大学理学部生物科学 学科分子発生	〒228 相模原市北里 1-15-1	①脊椎動物初期発生における形態 形成時の組織間相互作用 ②ニワトリ、ウズラ
丸山 千秋	理学研究所細胞生理学 研究室	〒351-01 和光市広沢2-1	①レンズ特異的に発現するMIP 遺伝子の転写制御機構 ②ニワトリ、マウス

石原 朋子	Dept. of Physiol., Cornell Univ. Med. Coll. c/o Dr. D. Herzlinger	1300 York Ave., New York, NY10021, USA	①肝臓と神経の発生 ②
(学)岡林浩嗣	東京大学大学院総合文 化研究科広域科学浅島 研	〒153 目黒区駒場3-8-1	①マターナルな因子の卵母細胞へ の蓄積から初期発生へ至るメカ ニズムについて ②アフリカツメガエル
(学)万徳 剛	北海道大学理学研究科 生物化学専攻生態情報 分子学講座二	〒060 札幌市北区北10条西 8丁目	①グアニル酸シクラーゼ発生 情報伝達機構 ②メダカ、ゼブラフィッシュ ウニ
(学)塚本康浩	大阪府立大学農学部獣 医学科獣医病理学講座	〒593 堺市学園町1-1	①細胞接着因子 ②ニワトリ、ウズラ

#### [賛助会員]

研究者のニーズにハートで応える(株)池田理化	〒101 千代田区鍛冶町1-8-6神田K Sビル T E L 03-5256-1051
(有)共進理工“細胞分別”ナイロンメッシュ	〒113 文京区本郷5-13-1ドエル本郷205 T E L 03-3813-1073
生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書(株)	〒210 川崎市幸区塚越2-260 T E L 044-533-0470
生命誌研究館	〒569 高槻市紫町1-1 T E L 0726-81-9750
先端テクノロジーをサポートする日京テクノス(株)	〒113 文京区本郷2-17-8鈴木ビル T E L 03-3814-2066
三菱化学生命科学研究所	〒194 町田市南大谷11 T E L 0427-24-6226
明治乳業(株)ヘルスサイエンス研究所	〒250 小田原市成田540 T E L 0465-37-3661
試薬及び理化学機器販売の理科研(株)	〒463 名古屋市守山区元郷2-107 T E L 052-798-6151
次代を担うバイオテクノロジー和研薬(株)	〒606 京都市左京区北白川西伊織町25 T E L 075-7212-0491

<住所・所属変更>

<住所変更>

志田 寿人	山梨医科大学分子細胞生物学研究室	〒409-38	山梨県中巨摩郡玉穂町下河東1110
藤本 弘一	(株)三菱化学生命科学研究所先端研究部門	〒194	町田市南大谷11
保田 叔昭	国立水俣病総合研究センター国際 総合研究部自然科学室	〒867	水俣市浜4058-18
土居 洋文	(株)富士通研究所情報社会科学研究所第2研究部	〒261	千葉県美浜区中瀬1-9-3
山下 茂	東邦大学医学部生化学教室	〒143	大田区大森西5-21-16
菊山 榮	早稲田大学教育学部生物学教室	〒169-50	新宿区戸塚町1-1
永測 昭良	京都大学医学部分子細胞情報	〒606-01	京都市左京区吉田近衛町
小林 渡	旭川工業高等専門学校工業化学科	〒071	旭川市春光台2条2丁目
仁科 行雄	横浜市立大学理学部機能科学科	〒236	横浜市金沢区瀬戸22-2
田村 宏治	東北大学大学院理学研究科生物学教室	〒980-77	仙台市青葉区荒巻青葉
木下 圭	東京大学大学院総合文化研究科		
山岸 敏之	埼玉医科大学第二解剖	〒350-04	埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38
三好 美咲	東京大学理学部動物学教室	〒113	文京区本郷7-3-1
武藤 彩	新技術事業団御子柴細胞制御プロジェクト	〒153	目黒区下目黒2-9-3萬有製薬(株)内
福井 彰雅	東京大学総合文化生命環境系生物	〒153	目黒区駒場3-8-1
木津川尚史	岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所	〒444	岡崎市明大寺町字西郷中38
黒尾 誠	国立精神・神経センター神経研究所	〒187	小平市小川東町4-1-1
伊藤 道彦	北里大学理学部生物科学科生物情報科学研究室	〒228	相模原市北里1-15-1
磯田 和良	大阪大学医学部遺伝子学研究室	〒565	吹田市山田丘2-2
(学)浦瀬香子	国立精神神経センター神経研究所疾病研究第5部	〒187	小平市小川東町4-1-1
(学)細谷俊彦	東京大学遺伝子実験施設	〒113	文京区本郷7-3-1
(学)中條信成	九州大学理学部生物学科発生物理学講座	〒812-81	福岡市東区箱崎6-10-1
(学)田村美和	お茶の水女子大学理学部生物学教室	〒112	文京区大塚2-1-1
(学)石井 衛	広島大学大学院理学研究科遺伝子発現機構学	〒739	東広島市鏡山1-3-1

<会員資格変更>

永測 昭良	京都大学医学部分子細胞情報	〒606-01	京都市左京区吉田近衛町
沢田 健	大阪医科大学第二病理学教室	〒569	高槻市大学町2-7
田村 宏治	東北大学大学院理学研究科生物学教室	〒980-77	仙台市青葉区荒巻青葉
吉田 尚弘	京都大学医学部分子遺伝学教室	〒606-01	京都市左京区聖護院川原町53
武藤 彩	新技術事業団御子柴細胞制御プロジェクト	〒153	目黒区下目黒2-9-3萬有製薬(株)内
福井 彰雅		〒232	横浜市内区中村町4-274-7
木津川尚史	岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所	〒444	岡崎市明大寺町字西郷中38

## 賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会  
会長 岡田 益吉

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約1,200名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願ひ申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局(浅島 誠)

〒153 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科生命環境系(生物)

TEL(03)5454-6632(直通) FAX(03)3485-2904

-----切-----り-----取-----り-----線-----

### 日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

( \_\_\_\_\_ 口 \_\_\_\_\_ 円)

住 所

会 社 名

担当者名  
電話番号

印

## 広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学、医学、薬学、農学をはじめ分子生物学、細胞生物学、遺伝学など、さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり、国内外に約1,200人の会員を持っております。

英文学術雑誌 Development, Growth and Differentiation は、日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し、国内に約1,200部、国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下、本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等、是非ご協力頂きますようお願い致します。

	広	告	料	
DGD 本誌	1	頁	年6回	150,000円
	半	頁	〃	78,000円
インフォメーション	1	頁	年3回	90,000円
サーキュラー	半	頁	〃	45,000円

尚、サーキュラー用の版下作製代は実費をいただきます。裏表紙は1頁10,000円高となります。

申し込み先：日本発生生物学会事務局（浅島 誠）

〒153 東京都目黒区駒場3-8-1  
東京大学大学院総合文化研究科生命環境系(生物)  
TEL(03)5454-6632(直通) FAX(03)3485-2904

----- 切 り 取 り 線 -----

## 広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

<input type="checkbox"/> DGD 本誌	1 頁
<input type="checkbox"/> 〃	半 頁
<input type="checkbox"/> サーキュラー	1 頁
<input type="checkbox"/> 〃	半 頁
住 所	
会 社 名	Ⓔ
担当者名	
電話番号	





# The Company of Biologists Ltd.

## 発生学・生理学関連雑誌ご案内

# Development

Editor-in-Chief : Chris Wylie

1987年より Journal of Embryology and Experimental Morphology から誌名変更した本誌は、発生学分野の代表的ジャーナルです。出版のスピードと質の高さは群を抜いており、カラーページの美しさ、投稿者へのページチャージがないこと、また同誌掲載の論文全てにつきそれぞれ200部の抜き刷りを無料で提供すること、なども特徴となっています。本誌は、植物と動物の発生メカニズムを解明する研究のためのフォーラムです。

▶ SCI® Journal Citation Reports® '94 Impact Factor : 8.064 (Developmental Biology 分野 23誌中第2位)

### RECENT CONTENTS

Spana, E. P., Kocpczynski, C., Goodman, C. S. and Doe, C. Q.  
*Asymmetric localization of numb autonomously determines sibling neuron identity in the Drosophila CNS*

Jaglarczyk, M. K. and Howard, K. R.  
*The active migration of Drosophila primordial germ cells*

Vodicka, M. A. and Gerhart, J. C.  
*Blastomere derivation and domains of gene expression in the Spemann Organizer of Xenopus laevis*

Treisman, J. E. and Rubin, G. M.  
*wingless inhibits morphogenetic furrow movement in the Drosophila eye disc*

Haegel, H., Larue, L., Ohsugi, M., Fedorov, L., Herrenknecht, K. and Kemler, R.  
*Lack of  $\beta$ -catenin affects mouse development at gastrulation*

▶ 年間購読概価 : ¥154,000 ▶ 1996年巻号 : Vol. 122 (12 issues) ▶ 商品コード : D13585V

## ～ 分子・細胞・発生生物学の

ニュースとレビュー ～



Editor : Adam S. Wilkins

権威ある ICSU (International Council of Scientific Union) の機関誌として創刊された本誌は、現代生物学の中心的領域である分子細胞生物学を対象分野とし、遺伝子発現や細胞構造から、分子医学や発生調節までのトピックスを扱います。基礎研究の進展状況に主眼をおきますが、医学、産業、農業への応用研究にも十分な配慮を加えています。特にこれらの分野で既に研究を進行・計画中の機関にとって本誌は興味深い文献となるでしょう。生物学研究において不確かで、争点となっている問題を取りあげ、著名専門家の見解を提供すると共に、活発な意見交換の場となることが本誌の目的です。

▶ SCI® Journal Citation Reports® '94 Impact Factor : 6.017  
(Biochemistry & Molecular Biology 分野 193誌中第22位、Biology 分野 57誌中第2位)

▶ 年間購読概価 : ¥45,400 ▶ 1996年巻号 : Vol. 18 (12 issues) ▶ 商品コード : B14170A

- 販売価格は、実勢レートをもとに算出し、概算価格にて表示しております。最新価格につきましては改めてご照会ください。なお、消費税は別途申し受けます。
- ご購読、見本誌のお申し込み、その他のお問い合わせは、最寄りの紀伊國屋書店営業所にお申し付け下さるか、雑誌部 マーケティング課宛にハガキまたはFAXにてご連絡下さい。

日本販売総代理店

株式会社 紀伊國屋書店  
雑誌部 マーケティング課

〒156  
東京都世田谷区桜丘5-38-1  
Fax. 03-3439-1094

# AQUA

## 1. 業務内容

### 設計・監理・施工業務

- ・水族館、水産試験場、大学、研究所、臨海実験所、栽培漁業センターなど水生の生物に係わりを持つ施設の建物および建物附属設備の企画、設計、監理および施工。
- ・建物および建物附属設備の設計、監理および施工。
- ・水生生物飼育用環境調節設備の設計、監理および施工。
- ・動植物用環境制御設備の設計、監理および施工。
- ・その他一般空調設備、給排水設備、衛生設備および電気設備などの設計、監理および施工。

### 機器開発、製作、販売業務

- ・生物の環境制御に必要な各種機器の開発、設計、製作および販売。
- ・スイミングプール用各種機器の開発、設計、製作および販売。

## 2. 機器及び装置

### 加熱冷却関連機器

加熱ユニット/冷却ユニット/加熱冷却ユニット/チタンヒーター/チタン製ルーツ式、投込式、プレート式熱交換器

### 測定記録制御機器

温度調節器/測温体/pH, DO, 塩分濃度制御装置/圧力調整器/水質測定器

### 恒温、定温器、温度勾配装置

低温恒温循環水槽/恒温循環水槽/階層飼育槽/温度勾配装置/超小型インキュベーター/超小型電子式五連恒温槽/ゼットコンデンサー/恒温コンテナ/恒温ボックス/ポータブルインキュベーター

### 無菌、殺菌、ろ過装置

海水用流水殺菌装置/オゾン紫外線流水殺菌装置/流水式加熱滅菌装置/無菌ろ過器/本城式プランクトン濃縮装置/脱塩素装置/活性炭フィルター/自動砂洗浄ふるい機

### 環境調節装置、恒温室

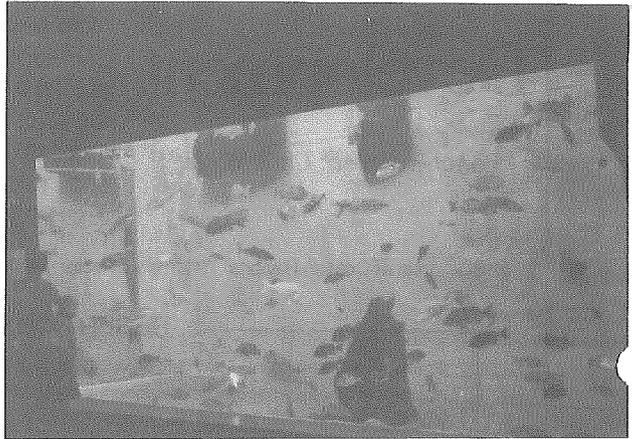
マルチハイデンス装置/水生生物環境調節装置/ヤリイカ飼育水槽/加熱冷却ろ過循環ユニット/水平垂直温度勾配反応試験装置/魚介類飼育用加圧水槽/潮汐水槽/溪流のぞき水槽/回流水槽/加圧式インキュベーター/魚介類呼吸量測定装置/塩分濃度調節装置/藻類培養装置/海藻育成器/魚類選好忌避温度試験装置/活魚輸送車/タイドプール/低温生物飼育培養室/恒温室/プレハブ冷蔵庫/動物飼育室/木村式多段式ふ化槽

### 飼育用品、医薬品

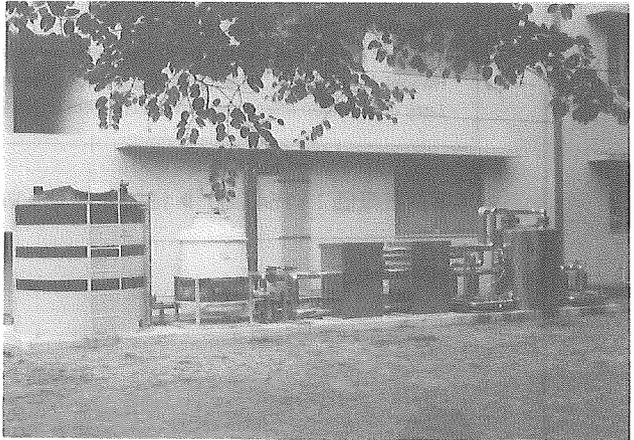
ガラス、アクリル、FRP、ポリカーボネート等各種水槽/フィルター/水ポンプ/空気ポンプ/エアーストーン/酸素分散器/エアコック/ジョイント/照明装置/自動ライトコントローラ/砂、砂利、大磯砂、珊瑚砂、天然ゼオライト等ろ材/人工海水/動物用(鑑賞魚用)医薬品/温度計/比重計/ビニールホース/網

### プール用品

照明用、観察用水中窓/水中照明装置/水門



▲福山大学マリンバイオセンター 大型飼育水槽 150 m<sup>3</sup>

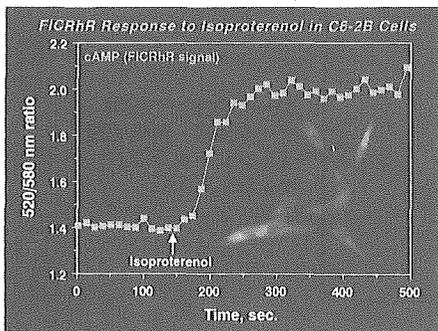
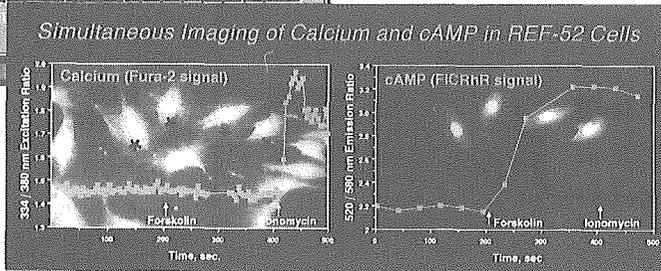
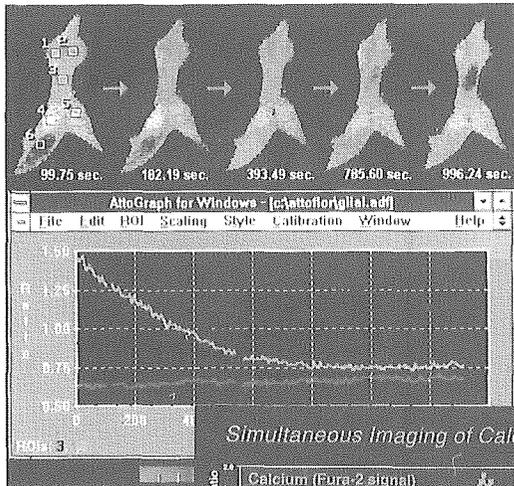
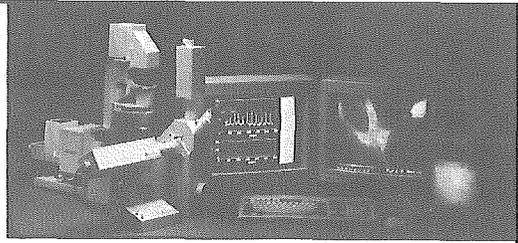


▲遠洋水産研究所 恒温生物飼育実験室用屋外冷却設備



▲東京都立大学 水棲生物飼育施設内のマルチハイデンス装置

# 細胞内イオンを 最高の時間分解能で測定



## 多重蛍光顕微鏡解析装置 Attofluor® RatioVision®

Ca<sup>2+</sup>、pH、Na<sup>+</sup>等の細胞内イオンやセカンドメッセンジャーcyclicAMPの活動をおどろくほど明瞭に、かつ抜群の時間分解能で測定し、多彩に解析することができる、まったく新しいデジタル蛍光比画像解析装置です。

### ●ソフトウェア RationVision®

汎用性の高いWindows™の環境下で動作するため、シングル蛍光プローブによるさまざまな測定から、たとえばCa<sup>2+</sup>とpHやCa<sup>2+</sup>とcyclicAMPといった2つの蛍光プローブを用いた測定まで簡単な操作で行うことができます。

### ●高速蛍光励起光源 RatioArc®

2つのアークランプを完全に電気的な方法により瞬間的に切り換えて交互に点灯する、蛍光比画像の高速取り込みのための新しい光源装置です。機械的な可動部がないため振動は一切ありません。切り換え速度は最高5kHz。ビオレットをフルに使って秒間30個の高画質な蛍光比画像を得ることができます。



ドイツ ツァイスグループ  
カールツァイス株式会社 顕微鏡部

〒160 東京都新宿区本塩町22番地  
☎03-3355-0332 Fax.03-3358-7554

大阪☎06-282-4322 名古屋☎052-777-1411  
福岡☎092-713-7821 仙台☎022-224-5621

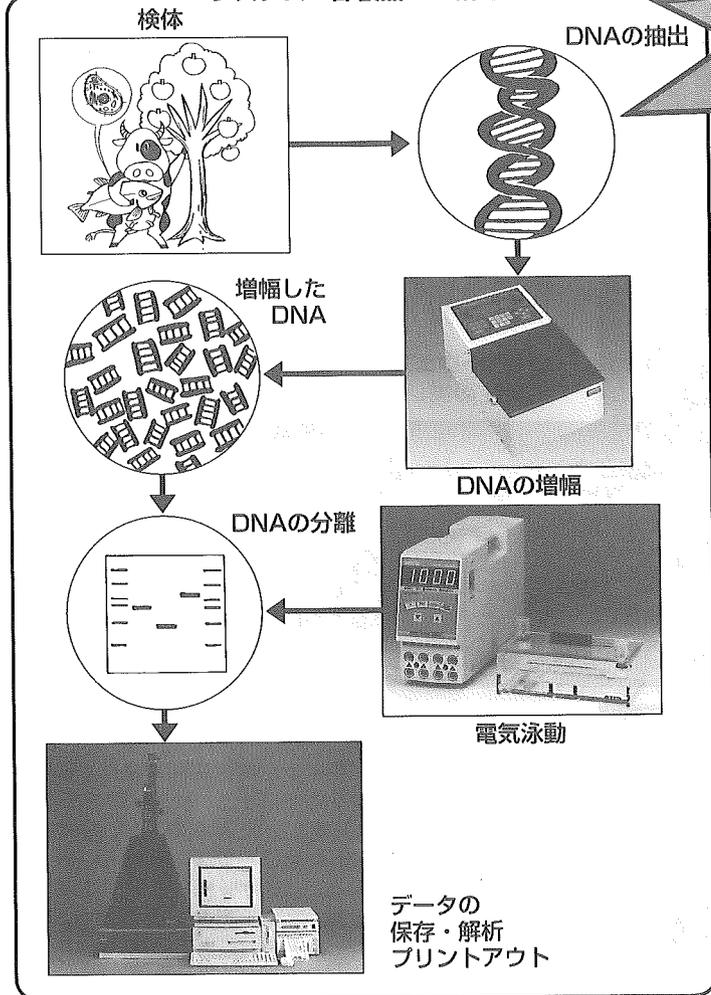
® :はAtto Instruments, Inc.の登録商標です。  
™ :はMicrosoft社の登録商標です。

# アトーの遺伝子診断システム

癌、変異遺伝子の検出  
 家畜感染症、雌雄判定  
 個体種別・鑑定  
 食品微生物、環境微生物の検出  
 あらゆる分野におけるDNA、RNAの研究に!

DNA増幅装置～電気泳動装置、ゲル乾燥処理装置、データ検出・保存・解析に至るまで完全システムをご用意できるのはアトーだけです。

システム一部製品のご紹介



遺伝子診断システムは  
 アトーにおまかせ  
 ください!

AB-1820型  
 DNA増幅装置  
 「ザイモリアクターⅡ」  
 ¥780,000

AE-6100型  
 電気泳動装置  
 「サブマージ・アガロース」  
 ¥30,000

AE-8450型  
 電気泳動用電源  
 「パワーステーション1000VC」  
 ¥150,000

AE-6920-MF型  
 データ保存・解析装置  
 「デンシトグラフ」  
 ¥4,500,000

詳細カタログ・資料の用意がございます。弊社営業部機器営業課までお問合せ下さい。

ライフサイエンス/バイオテクノロジー研究開発の情報誌

THE FRONTIER ELECTROPHORESIS

電気泳動最前線®

THE FRONTIER CHROMATOGRAPHY

クロマトグラフィー最前線®

ATTOでは「ライフサイエンス/バイオテクノロジー研究開発の情報誌」を発行しております。ご希望の方は弊社までご請求下さい。

ATTO

ライフサイエンス/バイオテクノロジー  
 研究開発を支援する

アトー株式会社

□本 社 〒113 東京都文京区本郷7-2-3 ☎(03)3814-4861(代表)  
 □大阪支店 〒530 大阪市北区南森町2-1-7 ☎(06)365-7121(代表)

生細胞の染色に  
**細胞蛍光標識キット**

Cell Linker Technology に基づく細胞染色法で、細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26 蛍光色素と希釈液とを組み合わせ、細胞蛍光標識キットです。

 **細胞機能に影響しません**

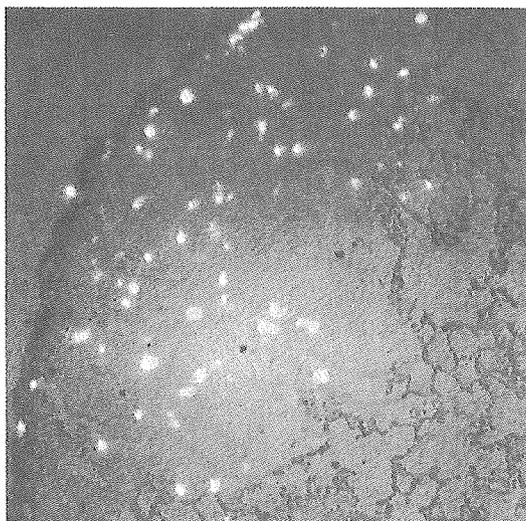
細胞と数分間混合するだけで、生細胞をその機能を損うことなく染色可能で、細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します。

 **簡便です**

従来  $^{51}\text{Cr}$  等を用いて行われていた LAK 細胞のモニタリングや NK 活性の測定が簡便に、しかも安全に行うことができます。

 **安定です**

ウサギ赤血球を標識した場合、PKH26 では in vivo でその溶出の半減期が100日以上を示し、長期のモニタリングが可能です。



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.

マウス肺癌組織に浸潤している、PKH26で染色した IL-2 処理リンパ球が観察されます。

Photo Courtesy of  
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb  
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元

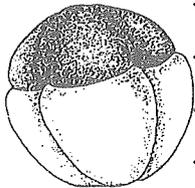


**大日本製薬株式会社**  
ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94  
TEL 大阪 (06) 386-2164(代表)  
東京 (03) 3828-6544(代表)

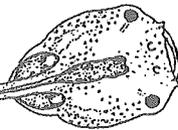
# 動物発生段階図譜

石原勝敏編著 / B5判・360頁・定価18,540円(税込)



- ◆海綿動物から哺乳類・ヒトまで34種の動物について、発生の段階・順序をわかりやすく写實的に図示した。
- ◆各動物について、入手法、飼育法、発生観察の要点などを概説し、実際の実験に役立つようにした。
- ◆主として発生実験に取り入れやすい動物種または発生研究に重要な種を取りあげた。
- ◆本書に記載されていない動物種の発生研究にも役立つよう、あるいは比較できるよう用語の統一解説などに配慮した。
- ◆実際に動物の発生を取り扱っている現場の先生方により、研究の上での注意点、工夫なども交えて解説した。

【目次】 カイメン / エヒドラ / ミズクラゲ / 海産ウズムシ / 淡水プラナリア / ゴカイ / アルテミア / チシマフジツボ / クルマエビ / ガザミ / カブトガニ / ウツキコモリグモ / ハグロトンボ / カイコガ / ヒシモンユスリカ / マガキ / エゾアワビ / シリヤケイカ / ヒメテッコケムシ / シマミズウドンゲ / ヒトデ / ウニ / 群体ホヤ / 単体ホヤ / マダカ / ニジマス / ウナギ / サンショウウオ / アカハライモリ / アフリカツメガエル / トウキョウダルマガエル / ニワトリ / ハツカネズミ / ヒト



共立出版

〒112 東京都文京区小日向4-6-19

☎03(3947)2511/振替00110-2-57035

Amenience のヤマト科学



## 新排水基準対応形——ネオクールアスピレーター

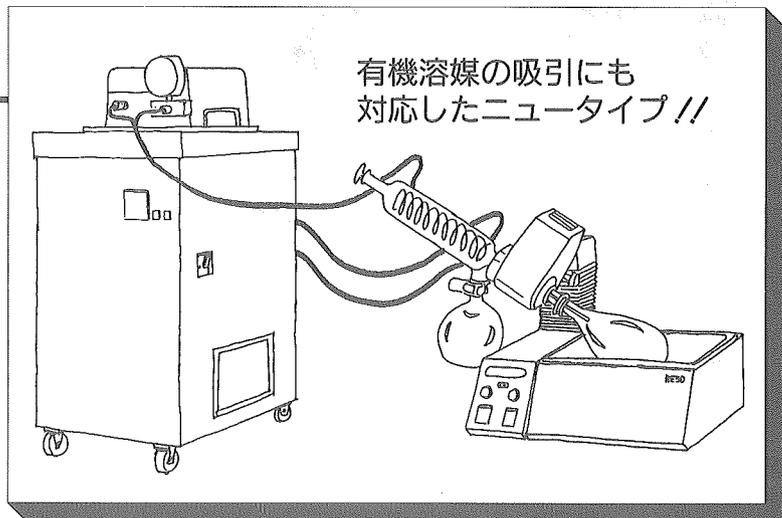
Yamato

### CF 600P 型

- 減圧と冷却を同時に行うCF600P型は、ジクロロメタン、ベンゼン等の流出を低く抑えており、ロータリーエバポレーターの減圧装置として排水基準をクリアできます。
- 1台で2台のロータリーエバポレーターに接続できます。
- 真空調節器(標準外)の使用により吸引条件を制御できロータリーエバポレーターの回収フラスコへの回収率がアップします。
- 特定フロン対応冷凍機を搭載しています。

#### ■主な仕様

使用温度範囲 -10~+30°C  
 温度調節器 デジタル温度調節器  
 外形寸法 幅364×奥行494×高さ1,007mm

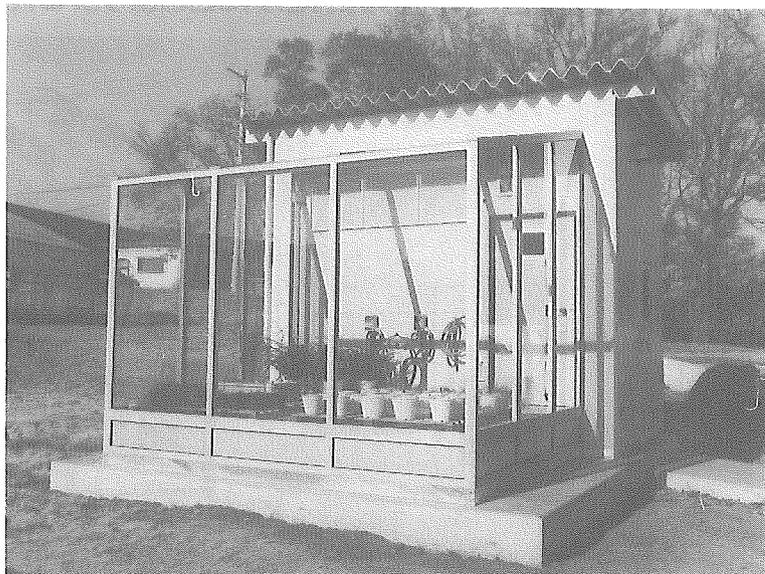


有機溶媒の吸引にも  
対応したニュータイプ!!

ヤマト科学 株式会社

本社：〒103 東京都中央区日本橋本町二丁目1番6号  
 TEL (03) 3231-1132

## バイオ関連の試験・研究をバックアップ



コイトロンSBH型

小糸工業のバイオハザード対応グロースキャビネットは、周囲環境の影響を受けずに、圧力コントロールシステムで実験室内を陰圧に保持します。また、コンパクトで高性能なフィルターユニットとの組み合わせで、実験対象物への空気流による外界からの悪影響を遮断、簡単操作機能をプラスして、高精度な温・湿度を再現します。



コイトロンKGBH型

バイオハザード対応グロースキャビネット

コイトロン **SBH/KGBH** シリーズ

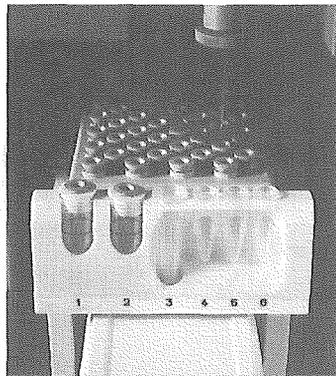
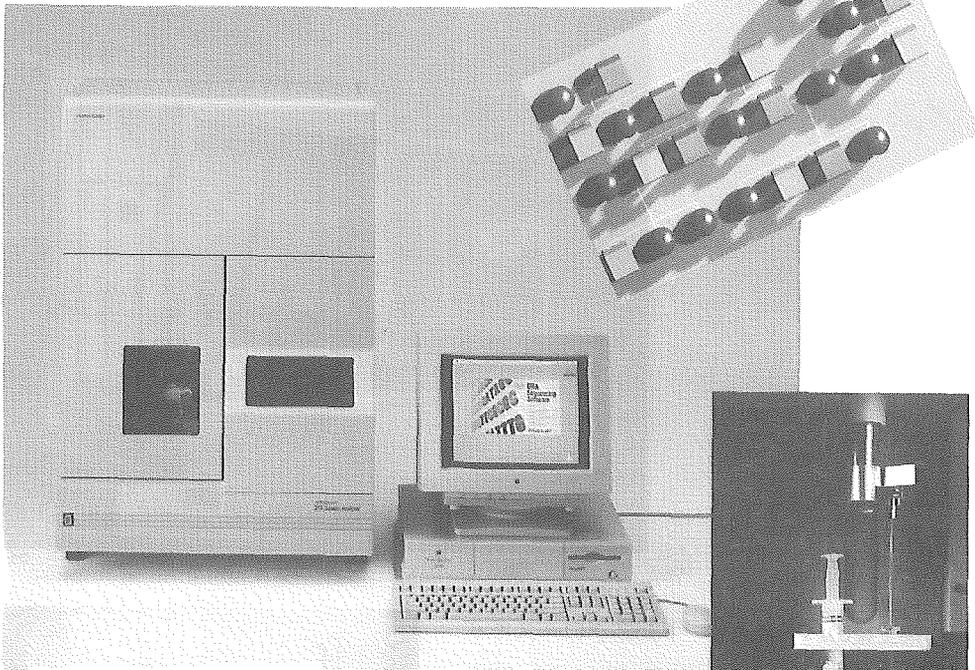
小糸工業株式会社

東京本部 〒108 東京都港区高輪3丁目5番23号 (日生高輪台ビル) ☎03(3443)9846 FAX.03(3443)6570  
札幌 011(722)5211 東北 022(225)7501 大阪 06(263)6371 九州 092(431)0838 筑波 0298(51)2311 沖縄 098(861)1805

DNAシーケンシング & DNAフラグメント解析

## ABI PRISM™ 310 Genetic Analyzer

医学、農業、法医学など…遺伝子解析技術は、  
もはや、基礎研究分野だけにとどまりません。



サンプル自動インジェクション用トレイ

ABI PRISM™ 310 ジェネティックアナライザは、多色蛍光標識技術とキャピラリー電気泳動技術を統合した、サイズ決定・定量などの遺伝子解析および核酸の配列解析を行える、初めての自動システムです。

- 使いやすく、データの再現性が抜群
- 特許の多色蛍光標識法により、シングルキャピラリーによる解析を実現
- フラグメント解析では、多様なアプリケーションに対応し、泳動時間も約20～40分と大幅に短縮

ポリマー自動充填用シリンジポンプ

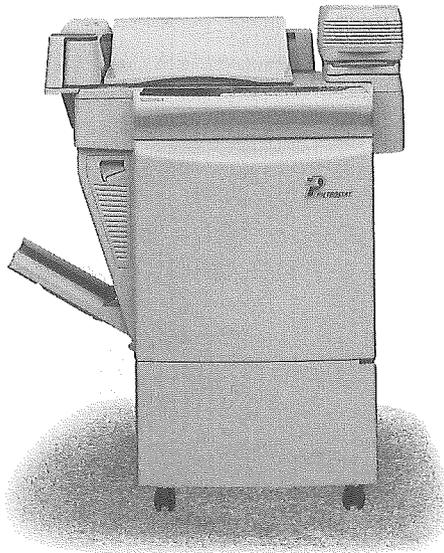
**PE Applied Biosystems** 株式会社 パーキンエルマー ジャパン  
A DIVISION OF PERKIN-ELMER アプライド バイオシステムズ 事業部

本社 ● 〒279 千葉県浦安市美浜1-9-2 ☎0473 (80) 8500/FAX 0473 (80) 8505  
名古屋 ● 〒464 愛知県名古屋市千種区池下町2-15 ☎052 (764) 1201/FAX 052 (764) 1202  
大阪 ● 〒564 大阪府吹田市豊津町5-3 ☎06 (389) 1201/FAX 06 (389) 1206  
福岡 ● 〒810 福岡県福岡市中央区赤坂1-16-10 ☎092 (771) 2755/FAX 092 (771) 2756

**FUJIFILM**

I&I - Imaging & Information

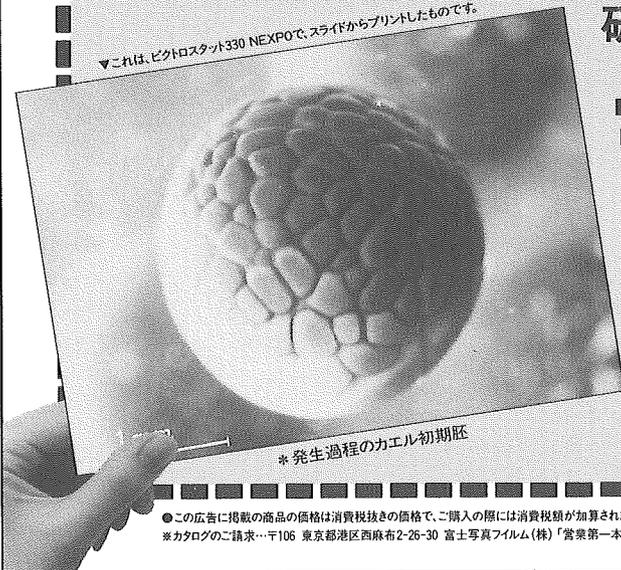
発生現象の記録、  
自信あります。



※写真はオプション(SE2001・PF300-A4)装着。

これは、スライドからも、標本などの実物からも、写真が撮れるシステムです。約1分で、微妙な色やディテールまで忠実に再現。正確な記録が求められる研究分野に、ピクトロスタット330 NEXPO。

▼これは、ピクトロスタット330 NEXPOで、スライドからプリントしたものです。



\* 発生過程のカエル初期胚

- 写真、印刷物、立体物から約1分でプリント。
- 別売りオプション装着で、スライドやプレパラートからもプリント。
- 仕上がりサイズは使用頻度の高いA4(210×297mm)・A5(148.5×210mm)。
- フルカラーのOHPシートもすばやく作成。
- 置く場所を取らない設置面積約0.3㎡の省スペース設計。
- 現像液もインクもトナーも不要で、メンテナンスが簡単。

フジカラー インスタントプリント システム

**PICTROSTAT 330**  
**NEXPO**



標準ユーザー直し価格(消費税別)  
本体価格

1,500,000円

L・2Lサイズのプリント仕  
上げのピクトロスタット50  
NEXPOもあります

●この広告に掲載の商品の価格は消費税抜き価格で、ご購入の際には消費税額が加算されます。価格はご購入の際の目安となるものです。●価格は1996年5月現在のものです。●仕様は予告なく変更する場合があります。  
※カタログのご請求…〒106 東京都港区西麻布2-26-30 富士写真フイルム(株)「営業第一本部 インスタントプリントシステムグループ」まで。 ☎0120-88-2165 受付時間9:00~17:00(土・日・祝を除く)  
フリーダイヤル